

スーツは、モダンな存在である

遠山 中野さんが翻訳された「性とスーツ」(白水社)を読んで面白いなと思ったのは、訳者あとがきに、男性は1850年代にサックススーツが登場した段階でファッショントというステータスから降りたものとされてきたのが、著者のアン・ホランドによると「スーツは、女性からみると常にセクシーである」と記載されていて、それが非常に印象に残っています。

中野 遠山さんのように現場で男性ファッションに関わってきた方にはきつときよつとする記述だったと思います。従来の見た目の変遷を記述するタイプの服飾史的な観点からでは、男性のファッションは1850年代以降は書けないものになっているんですね。

遠山 つまり、男性服の型が変わっていないから歴史的にそれを追っても意味がないとされていた。ところがアン・ホランドの視点はそうじゃない。スーツはモダンなものと解釈している。

中野 ええ、それはとても新鮮でした。彼女は、現在のスーツの型のインスピレーションを得ている源泉は新古典時代で、それは四肢を円筒形で包み、凹凸をなくしてなだらかにすることに、身体を抽象化する服であるという意味で、スーツはモダンであると定義しています。さらに、表面は変わり続けているのに本質は同一のものに見える、という性質もモダンと呼んでいます。

遠山 僕が「性とスーツ」を読んだのは、スーツがモードとして浮上してくると予感した時期とちょうど重なっていたんですね。サックススーツは19世紀中盤に登場する。その後20世紀に入ってモダンデザインが出てくるのですが、それは合理的志向を高度な機械文明によって普遍的な国際様式として広めていく運動であったわけで、建築やデザインなどに広く影響を及ぼし、今もモダンから人類は進化しきっていないといえる。しかし、そのずっと以前に男のスーツは完成していたという記述がスゴイ。

中野 そこにもスーツはモダンを先取りしていたというホランドの主張があらはれます。

遠山 ファッションというのは、特にストリートに発生する流行は、個人の楽しみが次第に大衆化されて流行が終わるという宿命みたいなものを背負っています。スーツは本来社会的であったものが個人の楽しみに使われだして、80年代にアルマーニがポストモダン化する。しかし世紀末、スーツは再びモダンに戻る。つまりクラシック(普遍的)スーツが復権してくるのです。

スーツ以前／スーツ以後

中野 ファッションが始まったとされる14世紀からフランス革命が終わるまでは、ファッションは政治的、経済的権力のただ中にありましたが、スーツが生まれてからは個人のオーラが支配します。その元祖というべき男性がボー・ブランメルで、そういう意味でもスーツの誕生は画期的なんですね。

遠山 ブランメルの登場によって、個人がファッションを主張できるようになった。それは換言するとタンデイズムの発生です。

中野 その通りですね。社会的な権力を誇示する外面を競う時代が終わわり、個人の内面が問われることになった。個として際立つ男がファッション・リーダーとして浮上してくるようになったんです。フランス語の「モード」という言葉は女性形と男性形で意味が違ってくる。男性形の「ル・モード」は「方法、様式」で、女性形の「ラ・モード」はいわゆる「最新ファッション」の意味。もともとは「何かをはかる絶対的基準」という一つの意味しかなかったらしいのですが、ある哲学の先生が言うには、「モード」の意味が分裂したのは18世紀後半のこと。それは人々が「内面と外見」「本質と現れ」を区別しはじめたのに対応している。と。ブランメル以降のファッション・リーダーに共通するのは、「ル・モード」と「ラ・モード」が気持ちよ

く一致していることなんです。「ル」と「ラ」を一致させて存在の絶対的基準になっている。遠山さんは、新しい追求とクラシックの回帰、という2方向を取れんす地点と、「ル」と「ラ」のモードが取れんす地点は案外近そうですね。

遠山 それと男が結局スーツを捨てられなかったというところで、次はスタイルが重要視されているわけです。ではスタイルとは何か。人間の存在そのものという人もいるし、服を着たときにその人に馴染んでいるのがスタイルという人もいます。僕は服というのは、誰にでも自分の良さがあって、それを生かしてくれる道具だと考えています。そしてその良さを見つめる作業が最終的にはスタイルの構築につながるのではないのでしょうか。

中野 19世紀に「服装哲学」を書いたカールは、衣服とは非力な自分自身を至高の次元に連ねるための触媒である、というようなことを言っています。彼のいう「触媒」にあたるのが遠山さんのおっしゃる「道具」にあたるわけですね。

風の谷の住人として時代のフォアランナーとして

遠山 僕はファッションとは、「風」だと思っんです。気圧の差がファッション熱の差があると風が生まれて流行が吹きだすし、平均的になると風がやむ。つまり流行が終わるわけです。スーツは社会服として客観的だったものが、いつしか主観的なものとなり、やがて元にもどるのも、その気圧の差によると思っんです。

中野 ジンメルという人は、ファッションとは現在と過去を隔てる分水嶺である。と言っています。風が吹いているあいだは「今」を感じることができると言っています。

遠山 20世紀後半は女性の時代と言われていますが、衣服を内面と関わった部分で自分の存在として考えること、

つまり「ル」モードがレイディース界でも脚光を浴びているように感じます。

中野 それは服飾史上、初めてのこともかもしれませんね。

遠山 ファッションはこれまでテーゼ/アンチテーゼで流行を創り出してきました。それが今では世間に対しての不毛な提案でしかないように思える。僕は社会に対して普通の服で十分戦えると思っんです。普遍的なスーツで主張できる。だから僕は普通の服の範疇で語りたし、「性とスーツ」は普通の服で語っている部分に惹かれます。

中野 わたしは過去数百年分のファッションの亡霊とつきあっているわけですが、面白いなと思うのは、ファッションは時代の美意識や価値観を先取りしてきた、ということ。ファッションは言葉や理屈よりも早く、人の無意識を支配してしまう力をもっているんですね。だからこそ異文化を越境する力も強いんです。専門職がいっばん早く国際化したのもファッションデザイナーですね。

遠山 ビジュアルと音楽は国境を越えやすいメディアですね。

中野 ええ、言葉が追いつかないうちに人の心を支配してしまう。だから逆に、ファッションは時代の変化に先行する、と見ることもできます。ファッションに大きな変化が現れば、必ず社会の変化はあとからついていく。ファッションは時代の先駆者、「フォアランナー」といえます。ただ、小さなトレンドの波ばかりが起こっては立ち消える、という今の状況は、ファッションというよりファッドと呼ぶべきものだと思います。ファッドであるうちは、異文化を越境する力がありません。同じ美意識をもつ仲間うちだけでウケて、飽きられて、終わりですね。でもそのなかから、仲間うちを超えて伝播するような「ファッション」が出てくることだってある。ファッドといえども、目が離せません。

What is Fashion, for us?

対談 「ファッションとはなにか」を考察する。

【服飾評論家】遠山周平 VS 中野香織 【東京大学教養学部非常勤講師】

「トレンドの商品しか売れない」。こう嘆くメーカーやバイヤーがシーズン毎に急増している。個性化の時代と言われながら、その実、トレンドに収められて非個性化の装いとなっているのが現在のファッションの状況である。そういう市場と現実を踏まえながら、「服を語る」服飾評論家と、「服をひもとく」講師・翻訳家が語り合った「ファッション」とはなんだ。

【とおやま・しゅうへい】1951年東京生まれ。「新装なったマルペン空空港。しかしアリタリアの遅延行為はいつそうひどくなった感じ。そんな空き時間を利用して「最後の晩餐」を見に行く。ここ数年モード・サーキット取材に追われて、ルネッサンス美術にふれたのは、これでたったの2回目。仕事とはいえ、余裕のない生活に「懺悔!」の今日この頃です」

【なかの・かおり】1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。89、94年英国ケンブリッジ大学客員研究員。現在、東京大学教養学部非常勤講師。98年、論文「21世紀における男のスカート」で、衣服研究協会ファガー賞優秀賞受賞